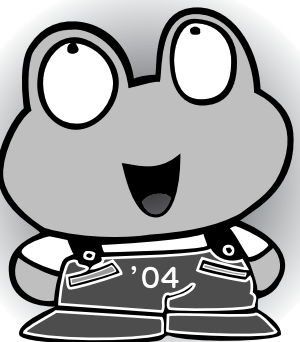


自分をカエル

見かたを

カエル



こんな話がありました。

「うちの子には、被差別部落のことなんか教えてないし、私もよく知らないのに、学校で教えるから差別が起きるのではないですか。」

皆さんはどう思われますか？

教えないほうがよいのか

部落問題について、教えないほうがよいと言う考え方は以前からありました。この考え方の根拠は、「教えることによって差別が起きる」と言うことです。「教えるから」「差別が起きる」のでしょうか

知らないことで人を傷つける

か。これは間違いです。なぜなら、かつて学校で同和教育がなされていなかった時代、つまり「教えなかった」時代にも差別はあったのであり、学校で「教える」ようになつたから差別が増えたという事実はありません。

逆に、「知らない」ために人を傷つけたり、他人の権利を侵害したりする場合があります。例えば、ハンセン病の元患者と接触しても絶対に感染することはありません。しかし、ハンセン病

に対する正しい知識を持っていない人（知らない人）は、元患者との接触を避けようとします。このことが、どれだけ元患者を傷つけたことでしょうか。

また、エレベーターに鏡が付いているところがあります。あの鏡は車椅子の方が現在移動中の階を示すランプが見やすいように設置されています。「知らない」人は鏡の前でヘアスタイルを直したり、ネクタイを直したりするでしょう。これではせっかくの設備が役にたたなくなり、つまり、障害者の権利を侵害する事になる

のです。

このように、知らないことで人を傷つけたり、権利を侵害してしまつことがあるのです。だから、「知る」ことは大切なのです。

正しい知識が重要

ただし、単に「知る」というのではなく、正確な情報を知り、その背景について正しく学習する事が重要です。現在、県内の学校などで起こっている差別事象を分析してみると、知識だけが中途半端に伝えられていた事が明らかになっています。これでは「知る」とが逆効果になります。したがって、部落問題を「知る」時には、正しい知識を身につける事が重要と言えます。

南部町人権施策課